開会挨拶

京都大学総長　　松本　紘

開会に当たりまして、ひと言ごあいさつを申し上げたいと思います。

このシンポジウムは今回で４回目を迎えます。京都からの提言というタイトルでシリーズもののシンポジウムを毎年行っています。京都大学が京都の地にあっていろいろ情報発信するだけでなく全国に向けて、その場に出向いて市民の方々に直接語りかけるということが重要ではないかと思っています。いろいろなシリーズがありますが、このシリーズは京都大学に附置されている研究所と研究センターが力を合わせて講演会、あるいはパネルディスカッションを開く仕組みになっています。

大学とは何ぞや、ということが最近問われていますが、私どもの大学は歴史が１１２年しかありません。「しか」と申しますのは、私どもは京都の町にいるわけですが、京都の町は１，０００年以上にわたって文化の中心でした。今でも日本文化の中心地の重要な一角を占めています。大学というのは昔からあったのかと思われる方もいらっしゃいますが、平安時代に既に大学寮というものがありました。そこでは大学頭（だいがくのかみ）という大学を育てる頭、まとめる人がいて大学博士（だいがくはくし）、今で言う教授の人たちがいました。当時のことですから学問は文章（もんじょう）学、それから明法（みょうほう）学、法律、政治というものが中心でしたが、それ以来、多くの学校が京都を中心につくられてきました。もちろんそれは、やがて全国に広がるわけですが、平安時代、あるいはその前の奈良時代から、日本人はまじめで、勉強しようという勤勉な国民性で有名です。遣隋使、遣唐使のことはお聞き及びだと思いますが、その当時から、中国から文化を移入して独自の日本文化を育ててきたという土壌があります。平安時代の後、室町時代になっても足利学校、鎌倉、室町、それから江戸時代に入って、京都に古義堂という伊藤仁斎のつくったものもありました。江戸時代はもちろんのことですが、いろんな学校形態がありました。これは、京都に都があったということが１つの理由ですが、それに呼応して舞や踊り、歌や能、お茶やお花といった日本独特の文化が京都を中心に醸成されて、それが伝統として京都の町に根づいています。

現代社会では、もちろん京都だけではなくて日本全国が日本固有の文化を世界に発信するようになりました。しかしながら、京都独特の雰囲気の中で学問というものが文化芸術と同じように、ずっと大切にされてきたと思っています。

その中で、明治以来、いろんな学問の行為がそこでなされてきました。いわゆる学部というのがありますが、京都大学の場合は法律、経済、文学、理学、工学、農学、医学、といった明治以来、あるいは建学初期につくられたものを始めとして、学部が１０個あります。それ以外に、大学院強化が近年行われましたが、独立研究科という形で７つの研究科がわれわれの大学にあります。それに加えて１３の研究所、９つの研究センターがありまして合計２２の研究所・研究センターが大学に独自の彩りを添えています。

今日お話しいただきますのも大変ユニークな研究内容です。研究所・研究センターというのは、時代に呼応してそのときどきの問題を解決するという研究所から、非常に基本的な学問を行う、基礎学術を追求する研究所までさまざまです。大変彩りの豊かな研究所群で、そこにおられる研究者は大変ユニークな、色彩豊かな、そしてまた、人のつながりを大切にする研究者たちです。多様な研究所群が、現代社会が要求する多様な困難な問題にどう立ち向かうかという課題に向けて研究を進めています。そういった意味で、多様性というのは京都大学の特徴かと思います。

名古屋で開催しましたが、本日ご参加の皆さんも日本全国からたくさんの申し込みをいただいています。本日、どなたが参加されたということは、後日、整理してみないとわかりませんが、北は北海道から南は九州まで、と言いたいところですが、九州は申し込みがなく、九州からの参加者はわが大学の九州出身者だけとなりました。南は四国に至るまで、随分たくさんの方の申し込みがありました。その中でも名古屋地区、この愛知県では約半数以上の申し込みをいただきました。残りの半数弱は全国各地から申し込みいただいています。

本日の話はいろいろおもしろい話がありますが、最後には益川先生のお話もございます。ノーベル賞は名古屋の地とも大変ゆかりが深くてめでたいことだと思っています。京都大学もたくさんの関係者がノーベル賞をいただいていますが、本学にはノーベル賞がカバーできないような非常に多彩な学問領域で、それぞれユニークで世界のトップを走っていてすばらしい賞をいただいている研究者がたくさんいます。益川先生以外にも基礎学問から応用に至るまで多彩な人物を擁している大学と自負しています。

そういった意味で、自由の学風というのがわが大学の標語になっていますが、自由と勝手気ままは違います。研究者一人一人の自由を大切にするということが、長年、伝統として重んじられてきました。研究者個々人の自由な発想に基づく研究を行うこと。それは、裏返すと、一人一人が責任を感じて研究をするということで、研究の心というものを大切にしてやってきたものだと思っています。

もちろん、研究と教育は不可分です。研究という結果のまだ見えない作業を行う中に学部生や大学院生に参加してもらって、人を鍛えるという人材育成の活動は教育以外の何ものでもありません。本日、さまざまなお話がありますが、そういった教育と研究に貢献する人たちのお話を、本日は一日、お聞き願うということで大変うれしく思っています。足元の悪い中、お集まりいただきまして感謝申し上げたいと思います。

京都大学は、これまでもそうでしたが、これからはさらに磨きをかけて魅力、活力、実力という３つの力を発揮できるような体制と個々人の努力を続けていきたいと思います。本日一日、長丁場ですが、ぜひいろいろお聞きいただきまして、積極的にご質問なり、あるいは違う形態で、休憩時間に先生方にお話をするなり、お互いに相互作用をしていただければありがたいと思っています。